Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development,
Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences)
2011, Vol. 58, 1 − 12.

動機づけ研究の道程

速　水　敏　彦

はじめに

とうとう本紀要に最後の稿を書く時がきてしまったようである。いや，本来なら1年前に書くはずであったが，定年が1年延長されたので覚悟？は十分できていたはずだ。とはいえ月日の経つのは何と早いことかと今さらながら思わざるをえない。

昭和41年4月に学部生として入学し，大学院を修了するまで9年間，さらに昭和62年に助教授として赴任してから25年間，これまでの人生の半分以上を本研究科で過ごしたことになる。

本稿ではこれまでの研究生活を振り返り，どのような考えで研究を展開してきたかを中心に記述していくが，それに付随して心の片隅に残っていることなども書き留めておきたい。

研究領域に関しては私は「動機づけ」という一本の比較的狭い道を歩んできた。しかし，その研究の道程は着実に上り坂になっていて若い頃見えなかった視界がぐんぐん開けてきたというほどの実感はあまりない。ひょっとすると同じ道をぐるぐる巡回していただけなのかもしれない。あるいは深い森林に迷いこんでしまっただけかもしれない。しかし，成果はともかく長い間，「動機づけ」と格闘してきたことは確かだ。少し道草することも断わって書き始めよう。

学部学生・院生時代

高校時代には漠然と将来は高校教員か出版社で本の編集に関わりたいと考えていた。しかし，教養部で心理学実験の授業が始まり，結構のめりこんだ。今考えるとミュラーリヤーの錯視だとか，鏡映描写とかいったかなり古くからの心理学実験の定番をしていたにすぎないが，お互いに実験者・被験者になってデータを集め，それから人間の行動原理を垣間見るということが新鮮で楽しかった。内発的動機づけだけではない。小中学生と同じだが，当時助手だった辻敬一郎先生から提出するレポートに一人一人に実に丁寧なコメントを書いて返してもらうのもうれしかった。また，同級のK君とはいつもレポートの長さの最長不倒距離というのをなぜか競争していた。

2年後期には調査法の授業が始まり續有恒先生を知ることになった。風貌からして威厳のある先生で，早朝授業では時間までに来ないと教室の鍵をかけられると先輩からも聞いていた。しかし，失礼な言い方だがいたずらっ子のようなところもあった。郵送調査に関連した授業で漫画に関する調査を考え，調査主体を名古屋大学教育学部とした場合と架空の名称の「マンガの友社」にした場合，回収率がどう異なるかなどということをやや先生主導で行ったのを覚えている。先生の授業で話される内容には私は納得できることが多かった。「續日常心理学」と揶揄する人もいたが，先生の心理学はまず身近な人間（自分も含めた）の現実の行動をしっかり観察するところから始まっていた。そして，この精神は私の今の心理学に対する姿勢にも生きていると思う。また，先生の雑談は印象的で今でもいくつか覚えている。検便で自分の便でなく犬のそれをもって行ったのに問題なしであったこと，先生に心を寄せた姉妹がいて婚期を逃して今も二人で暮らしていること，ホテルの部屋の洗面で放尿したこと等々である。今考えると何処までが真実であったか疑わしい面もあるが，こんな話をおそらく当時，私は前のめりで口をあけて聞いていたのではないかと思う。その雑談は生身の人間の心理を考察する手がかりを提示するものだったようにも考えられる。また，名大祭では續先生が作成された「相性テスト」を使い，アベック（男女の二人連れを当時はそういった）を呼び込み，白衣を着こんで偉そうに相性が良いとか，悪いとか説明して謝礼を得たのも楽しい思い出だ。しかし，相性が悪いといわれたアベックにとってはずいぶんショックで迷惑な話であったろう。別のところにも書いたことがあるが，私はある時先生への年賀状に「先生は現代のツァラトウストラです」と書いた。自分自身が不安で劣等感に満ちていた時代に奔放で豪快で強い存在にみえた先生に私は一時期陶酔していた。

本学部では現在でも続いているが3年の後期には自由研究（現在は第5，当時は第7）が始まった。心理学を少しかじっただけの者にとって自分でテーマを探して

やってみろといわれても何を問題にしていいのやらわからないというのが大方の正直な感覚だろう。私も例外ではなかった。そして早速，当時から研究の手伝いなどをさせてもらうことで知り，大学院生だった梶田正巳先生に相談した。先生はあまり迷うことなく「速水君，Persistenceについてはこれまで研究されていないよ」と言われた。単細胞の私はこれで大研究ができると思いこみ，第7の研究テーマを即座に決定した。人生は不思議なものである。結局私はこのテーマに関連した動機づけをこれまで40年以上も探究し続けてきたことになるからだ。もし私が別の人に相談したり，ミーハー的な反応をしない人間だったら，研究者になっていなかったかもしれないし，動機づけとは別の分野の研究をしていたかもしれない。

卒論は續先生に指導教官をお願いして書くことになった。現日本福祉大学学長の加藤幸雄さんら4名が指導生だったが，威厳のある先生が4人で指導を受けに行くと自分で丁寧にお茶を入れて下さった。卒論は達成動機づけの理論を用いてPersistenceを予測することができるかを検討するものだった。しかし，実験課題で行き詰り先生に相談すると先生自ら「しゃぼん玉通し」というオリジナルな課題を考案してくださった。それは様々な円の大きさに穴をあけておき，そこにしゃぼん玉を通すというものだった。ただ，私自身はこの課題で中学生を対象に実験する過程で早くも心理学についてかなり深刻な疑問をもつようになった。それは簡単にいえば，私の心理学実験では「しゃぼん玉通しを何回やるか」でその人のPersistenceを見ることになるが，勉強にPersistenceを示す人は「しゃぼん玉通し」のような遊びのようなことは早々とやめて家で一生懸命に勉強するのではないか，ということであった。実験結果に反映されたものが必ずしも実生活のミニチュアではないという推測であった。だとすると心理学でやっていることは一体何なのか。外国で行われている達成動機研究でも実験は輪投げのようなゲームがよく使われていた。輪投げなどに当人のやる気が本当に反映されるものだろうか。私は自分のやっていることの価値に疑問を持ち始めた。それでも，その頃には既に心理学の専門家になろうと決めていたし，教員免許の単位もそろえることができなかったので迷うことなく大学院に進学した。しかし，キャンパスはその頃，大学紛争で騒然としていた。教育学部も封鎖されるのではという情報が毎日のように飛び交い，こんな緊急時，のんびり勉強などしている場合ではないと公然という人たちも少なくなかった。卒業論文を書く頃は私のようないわゆるノンポリでも学部の自衛団？として今の小会議室あたりのところに泊ったことがある。

修士課程へは24名ほどが受験して4名が合格したと記憶しているので，現在の大学院に比べて特に競争率が低かったわけではない。そして，当時の教育心理専攻の院生の総勢は博士課程の人を含めて十数人であったように思う。研究室と同じ広さの大学院生室には1部屋2，3人とゆったりしたもので，ステレオを備えた休憩室なども別にあり優雅に暮らしていた。大学院生たちは自主的に勉強会や研究会をいくつかつくり議論していたが，現在の院生たちのようにジャーナルに論文を投稿しようとか学位論文を準備しようという雰囲気はあまりなかった。多くの人たちは学習心理学，性格心理学，社会心理学などを研究テーマにしていたが，丸井先生や村上先生の影響で少しずつ臨床心理学を専門にする人もでてきた頃であった。

大学院時代に統計学が専門の若い水野先生が赴任され統計機械室を整備し，様々な統計プログラムを作成してくださった。私の場合，卒論のデータ整理は主に算盤でやっていたので，コンピュータの威力に目を見張った。修論では当時としてはかなり最先端をいっていたと思われるがコンピュータプログラムとして因子分析だけでなく，数量化の方法Ⅲという手法まで使わせていただいた。とはいえ当時のコンピュータは現在ほど迅速でなく，一晩かかって3〜4因子の因子分析がやっと可能という性能であった。しかし，その数年前にはある社会心理学者が手計算で因子分析をするのに夏休み全部をつぶしたという話も聞いたのですごい進歩だと感じていた。水野先生は胃が弱いとのことだったが煙草とコーヒーがお好きだった。煙草をくゆらせ，時々胃が痛むのか片手で腹を押さえながら，なぜか胃に悪いコーヒーを何杯も飲み，黙々と夜遅くまで統計機械室でコンピュータプログラムを書いておられた姿が忘れられない。

博士課程にはいった年の9月に指導教官だった續先生が研究室でクモ膜下出血で倒れられ急逝された。その頃，東大出版会から心理学研究法という本が何冊かシリーズで出されていたがその出版の中心人物であった先生は多忙を極められていたようだ。そして私は青年心理学の久世敏雄先生に指導教官を引き継いでいただくことになった。久世先生のことで印象に残っているのは，ある教育雑誌の原稿を連名で書かせていただいたことがあるが，私が書いたところは先生によってほとんど書きかえられて掲載された。私の書いたものはおそらく読むに堪えないものであったのだろう。しかし，原稿料が送られてきた時先生は私に自分の分担分を取るように言われた。私はもはや自分の文章が残っているとは思えなかったので固辞したがそれでも受け取るように言われ結局，受け取ってしまった。論文もまだ書けない者が教育雑誌

に柔らかい文章を書けないのは今思えば当然のことであるが後味が悪かった。その後，私が教育雑誌の文章にもかなり時間をかけるのはその時の罪滅ぼしなのかもしれない。

さて，大学院での研究は修士論文はこれまでの延長線上の「達成動機と達成行動」というものであったが博士課程に進学してからは「Locus of Control」という1966年にロッターにより提唱された概念に興味を抱いた。これこそまだ日本では誰も研究していないものだと勇んで始めた。まずは尺度を作ることだと尺度づくりから開始した。その分析のためにも水野先生が信頼性と妥当性，両方から項目分析するコンピュータプログラムなど新しい発想を組み込んだものを貸して下さった。

他に博士課程では指導教官の久世先生が附属中・高等学校の生徒を対象にして社会的態度の縦断的研究を始められたのでその手伝いをさせていただいた。私がこれまで動機づけ研究以外に青年心理学的研究にも少しだけ足を突っ込んでいるのはこの時代の影響といえる。

大阪教育大学での12年間

現在の院生たちは就職難で辛い思いをしているが，当時は院生の数は少ないのに大学進学率が高まり大学が拡張されていった時期でもあったので就職で苦労することは全くなかった。今の若い人が聞いたら恨まれそうだが私自身，大学院生活5年間で1本も審査付き論文が書けなかったにも拘わらず，運よく大阪教育大学の助手に採用された。博士課程で同期だった他の二人は満期修了することなく途中で国立大学に就職した。正直にいえば，私にも博士課程の3年間に2度ほど地方の国立大学からの誘いもあった。

しかし，大阪教育大学で体験したのは学会誌掲載論文がないのに先生をしているという肩身の狭さであった。当時の大阪教育大学は北尾倫彦先生始め学会で大活躍の先生が多く，各先生から論文の抜き刷りを渡される度に劣等感を強く感じた。さらに修士の大学院生でも学会誌に論文を載せている人もいて見下されているような気がした。

その頃，取り組む研究の方も正直行き詰っていた。Locus of Controlの尺度づくりを進めて，項目を取り替え引き換え信頼性や妥当性を上げていこうとしたがそれほど顕著に高められるものでもないし，その概念自体が他の様々な事象と関連は付きやすいが，いずれも薄い関係しかもたない性質のものであることにも気づいてきた。しかし，一方で審査に通る論文を書くという内的外的圧力も感じ，なんとかそれを実現できるテーマはないものかと悩んだ。

そして結論を出したのが，これまでの研究とは全く異なる再検査効果の研究である。大学院時代に久世先生の下で社会的態度の縦断的研究をしたが，それは毎年同じ調査を実施することで縦断的変化を問題にする研究であった。しかし，私は実際に附属の生徒に毎年調査を実施することを通して，データ上の差得点は本当に態度変化を反映したものなのかという疑念を抱いた。たとえ1年間隔であれ，同じ調査に直面した時に人は前と同じ気持ちで質問内容だけに反応するのだろうかというのが根本的問題であった。しかし，この問題は私が経験を通して感じたもので本当に心理学の研究課題の一つとして位置付けられるのかという不安もあった。しかし，文献を調べていくと海外では既に1950年代にこの現象に注目した人がありTest-retest effectsと命名していることも分かった。その効果とは検査に慣れることで2回目の方が反応が社会的望ましい方向に変化するというものであった。私は早速，YG性格検査を再度実施してそのような傾向がみられるか検討した。その際，当時としてはまだあまり一般的ではなかったが。これも水野先生から教えられた項目の内部一致性の指標であるα係数も算出してみた。結果として，外国で指摘されたような社会的望ましさ方向への変化と内部一致性の高い方向への変化の2つの再検査効果が見られた。これは検査を受けることの学習を通して人は，より社会的に望ましい方向に反応し，さらにより一貫性のある答え方をしようとするようになることを物語っている。私は何か大発見したような気持で高揚し，初めてこの論文を学会誌に投稿し，掲載することができた。

しかし，この研究も再検査効果があると言う事実を明らかにしただけでどのようなメカニズムで生じるのかまで突っ込んで深めることはできず，2，3年で終止符を打つことになった。研究を深めるためには相当の統計的力量が必要だと直感し，かつその才能のなさを自覚したことによる。さらに自分としてはかなりインパクトのある研究だと自己評価していたがほとんど注目されることもなかったということもある。事実現在でも「再検査効果」などという言葉があることを知っている人はほとんどいない。ただ私がこのようなテーマの研究をしていたことから一時，評価・測定の専門家とみなされた節がある。今でも教育心理学年報では領域別のその年の研究を概観するが，その頃私が評価・測定の領域を書くのを任された。本来なら専門ではないからとお断りするのが筋かもしれないが，当時は若かったし，頼まれた原稿は決して拒まずの精神で通していたのでわけがわからないままに書いた。

私は若い頃は結構新しい外国のジャーナルにも何か面

白いテーマはないものかと大まかには目を通していた。そして私は，研究とは演劇のような要素があると思い始めていた。つまり，どのような題目の研究をするか，その選択が重要でその質は必ずしも役者の技量だけで決まるものではないように思われた。何を問題にするか，で論文の価値の半分以上は決まってしまうのではないかと今でも思っている。そして，その頃注目したのがワイナー（Weiner, B.）の達成動機づけの原因帰属理論である。動機づけが原因の帰し方により決まるという理論で，帰属→帰属の次元→心理的効果（期待の変化・自尊感情）→達成行動の理路整然としたモデルに感動した。達成動機をTATで測るという漠とした測定でなく，ある状況の原因帰属を測るという明瞭さも魅力的であった。ただ，ワイナーのモデルは特に学校場面を想定したものではなかった。そこで，学校場面の動機づけに応用できるようなモデルが必要だと考えた。これはおそらく名古屋大学で学んだ影響が大きいだろう。「教育心理学の不毛性」という言葉を授業で何度か聞き，少しでも教育現場で役立つ教育心理学でなければという気持ちを強く抱いていた。

このような調査研究を開始してみると名古屋大学で水野先生から教わった統計の知識は大いに役立った。その頃，阪大の大型計算機にオンラインのかたちで大阪教育大でもコンピュータが使えるようになったが，文系でフォートランを書ける先生はまだほとんどいなかった。しかし，私は曲がりなりにもその文法を学習していたので大量のデータを短期間に処理することができた。データを一枚一枚カードにパンチしていく作業を毎日のようにやっていたことを思い出す。こういう単純作業は研究が進んでいるというような実感を与えるので私としては意外と快適な時間だった。研究者として苦しいのは何時間も机の前に座っていても新しい研究のアイデアが見つからなかったり，1枚の原稿用紙も埋まらない時間である。

さてワイナーの理論はかなり幅広い内容を含んでいるので研究課題も次々に生まれて研究は順調だった。原因帰属の一連の研究で私が最も苦労し自分自身では傑作だと思ったのは原因シェマ（スキーマ）の研究である。つまり，小学生低学年では同じ成績なら努力した人ほど賢い（能力が高い）と思うが高学年では同じ成績なら努力しなかった人ほど賢いと思うというような努力と能力の間の逆補償スキーマの成立に関する発達的研究であった。これをどう測定するかが問題であったが私は独自の質問紙による測定具を作った。これを思いついた時は大発明でもしたような気分になった。よく考えれば，私はしばしば自分の研究について高揚し，自己評価を高くすることがある。私は外面的には冷静だが，結構，内面は反応性が高い。アイゼンクの指摘は正しい。私は内向性なので反応性がかなり高いのである。

研究の水準という点では実は当時，私は一つ目標があった。それは教育心理学会で若手の優れた研究者に与えられる城戸奨励賞をとることだった。このように告白すると（前にもどこかに書いたが）不純な動機をもつ研究者だと軽蔑されるかもしれないが，動機づけ研究者が自分の動機づけを正直に語っておくことは大切だろう。城戸奨励賞をとりたいという思いが強かったのは，續先生のご家族が香典の一部をその基金にと寄付されたことが大きいが，他に第1回の受賞者である北尾先生について大学時代東京教育大で同級だった水野先生から「お前は北尾に似ている」と何度も言われ受賞も真似してみたいと思っていたこと，先輩の梶田先生が既に取られていたことで名大出身者として自分が続かねばと気負っていたことなどによる。その受賞対象者は35歳未満と定められていたので，その頃は毎年，教育心理学研究に論文を投稿し，学会の時期にはいつも今度こそ受賞できるのではないかと内心期待していた。いつも辛口の小嶋先生からの年賀状で「城戸賞finalに残りました」という言葉をいただいたことも，あと一歩だと勇気づけられた。しかし，現実は厳しく，おそらくこれが最後の対象論文になろうというものを作成することになった。私はその論文を審査者の立場になって，こことここでポイントがあげられるなどとかなり計画的に書いたことを覚えている。そして運よくその論文が35歳寸前のところで掲載され受賞することができた。城戸奨励賞は筑波大学での教育心理学会で，当時の理事長の肥田野先生からいただいた。懇親会で会員の皆さんから祝福された後，ホテルまでの11月のかなり寒い夜道を自分だけは熱くなり一人で奇声を発し，涙を流しながら帰ったのを覚えている。副賞は確か5万円であったと思うが今でもその祝袋は私の引き出しの片隅にある。しかし，私の観察では涼しい顔をして学会賞を当然のようにもらったというような研究者も少なくない。自分がいかに頭が悪く，恰好悪かったかを痛感せざるをえない。

大阪教育大では北尾先生が主宰される主に現場の教育に熱心な先生を集めた研究会が月に1度ほど行われており，私も参加させていただいた。教育現場での学習に関する心理学的問題をレポートして議論するというようなものだった。不毛でない教育心理学を志向する自分にとっては大いに勉強になった。このような活動が基になって私は北尾先生と共著で「わかる授業の心理学」を出版させていただいた。この書は教育心理学の教科書としても使えるが，かなり教育現場の視点を盛り込んでお

り，多くの人たちにも読まれたらしく版を重ねた。また，その頃北尾先生自身，教育評価について国の委員をしておられたこともあり，私にも時々教育評価について書くようにと誘っていただき，教育評価についてはかなり勉強することができた。

博士学位は今では課程内博士が普通で，本専攻でも2本の掲載論文で提出資格ができる。だが当時はまだ博士学位をとる人は極めて少数で，多くは相当業績をあげた助教授以上の人が多かった。しかし，本研究科でも昭和60年前後からもっと多くの人に学位をとるように推奨すべきとの機運がうまれてきたらしい。そこで私もまずは予備審査というものを受け学位提出の準備をすることになった。今の人たちは初めから学位論文を頭において研究を進めているのであろうが，私などはとにかく思いつくことを次々に論文にしてきたというやり方だったので学位論文として一つの道筋を作るのには苦労した。また，学位論文作成時と先の北尾先生との共著の「わかる授業の心理学」の原稿提出の時期とが重なった。当時の私の研究室は2階であったが，前にプレハブの校舎があり，夏は照り返しが強かった。さらに研究室の窓は現在のような左右に開く窓でなく，下から30度ほどだけもちあげるかなり古い窓で少し風が吹くと窓枠の鉄粉がパラパラと落ちた。もちろん風通りは極端に悪かった。しかし，それでも，夏休みには毎日何ページ書くと目標を立てて，蒸し風呂のような研究室で奮闘した。確かに人は悪条件でもやろうとすればできるものである。最近，本学でも節電でクーラーを止めるようにいわれるだけで私もぶつぶつ言っている口だが，あの時を思い出し時々停止してみることがある。

昭和61年10月に学位を取得した。達成動機づけの原因帰属に関する研究を始めて10年近くたっており年齢的には40歳目前であった。現在の院生からみれば学位一つをとるのになぜそんなに時間がかかるのといいたいところかもしれない。現在は私のような課程外博士でなく課程内博士が普通であり，30歳前に取得する人も少なくない。しかし，そのように学位が比較的短い期間にとれるようになったことが果たして本人たちのためにほんとうによいか否か判断はむずかしい。学位は取得しても就職できない人たちも多い。できるだけ早期に短い論文で学位取得をさせようとするよりも，もっと時間をかけて，学位取得のハードルを上げた方が本人にとってもよいのではなかろうかと思うこともある。

学位取得の翌年の4月から私は名古屋大学に戻ることになったが直前の3月に大阪教育大の小野章夫先生が急逝された。イギリスで博士号を取得されていた先生には英文要約のチェックでいつもお世話になった。先生に英文をチェックしていただき，その後，先生のお宅や飲み屋でこちらがご馳走になることが多かった。

名古屋大学での助教授時代

正直，母校で教えるというのは夢のまた夢であったがそれが実現した。自分は実に運のよい人間だと思う。当時のスタッフは村上英治先生が最年長で，原岡先生，久世先生，小嶋先生，田畑先生，梶田先生，若林先生，蔭山先生，村上隆先生それに助手の先生たちがいた。准教授以上のポストは現在がその1.5倍ということになろう。当時の教室会議は随分昔からのやり方で，お茶菓子の準備が当番制で行われていたし，お茶はもちろん教室事務の人が用意してくれた。いわば家庭的雰囲気で行われるので会議はいつもかなり長くなった。この伝統は今も少し残っている。さらに大学院入試が行われて判定会議をする時などは侃侃諤諤，今とは違って自分の指導生をなんとか合格させようと必死の先生も多かった。大学院生が増加した今，先生たちはずいぶん淡泊になってしまったようにもみえる。

さて，配置転換の2年目に私はフルブライト若手研究者の枠でUCLAのワイナー教授のもとで在外研究することになった。もっとも本来は不合格で次点であったが誰かが急に行けなくなって私が運よく行くことになった。ただ，行く前も後も自分の英語能力には自信がないのでフルブライターとしては一種の負い目を感じている。受け入れに当たってワイナー教授は厳しく「日本の研究者は英語が話せず，遊んで帰る人が多い」と批判されたが結局，引きうけていただくことになった。当時，2人の子どもも小学生だったので1989年の夏から1年間，家族4人でロサンゼルスで過ごすことになった。厳しい先生を想像していたが実際会ってみるとワイナー教授はいろいろ細やかな気を遣ってくださる日本人的な感覚をもった人だった。当時はワイナー教授のTAを唐沢かおりさん（現東大教授）がされていたし，丁度，田畑先生も心理学教室で在外研究中，また当時大学院生だった水野リカさん（現中部大教授）もいて半分日本にいるような気分だった。

私はアメリカの中学生を対象にした研究をしようと先生に相談したが，即座に否定された。当時からアメリカでは研究倫理委員会のチェックが厳しかったようで，中学生を対象にしていたらいつ実施できるかわからないというようなことを言われた。ワイナー教授自身の研究も学習の動機づけに引用されるが，研究協力者は大学生ばかりなのはそのようなことと関係していたようだ。そこで私は大学生を対象にした研究計画にきりかえることにした。しかし，大学生でも日本の場合のように授業で調

査用紙を一斉に配布して行うというようにはいかなかった。協力者になることで心理学の取得単位の一部になるようで，授業外の空いている時間に学生にわざわざ実験室にきてもらい数人ずつ調査した。この調査も実際にはアメリカに長く住んでいる日本人学生に依頼した。

データ処理のためのコンピュータ利用は米国でも英語でのコミュニケーションなくできるのでスムーズに行えた。論文作成の段になるとワイナー教授から直接指導を受けることになった。彼は文章の推敲が実に丁寧だった。毎日，1ページも進まぬほどゆっくりであったが，毎日，前の分も含めて再度チェックした。したがって後になるほど時間がかかったが，こうしてワイナー教授のような無駄がない，論理的にすっきりした文章の論文になるのかと感心した。

ワイナーの理論では課題の困難度を原因の次元では外的で安定性が高いものと位置付けているが後者の安定性が高いという見方が以前から納得できなかった。このことについて尋ねたところ，彼は課題の遂行中は課題の困難度の認知は変化しないということだという返答であったが，課題は次々異なるものになるわけで今でもこの位置づけは納得がいかない。

在外研究を通して著名なワイナー教授と親交をえたことは一生の宝であり，数年後に名古屋大学で教育心理学会を開催した折にも特別講演をしていただくことができた。ただ反省すべきは英会話能力はさっぱり上達しなかったことである。家族で過ごしたし，周りにすぐに言語上のことで援助していただける日本人研究者がいたことにもよるが自分の性格や才能のなさが大きい気がしている。私なりには当時は英会話にかなりの時間とお金もつぎ込んだはずなのだが……。

この時期，ワイナーの達成動機づけの原因帰属理論は一応の完成をみている時期であったし，次に何を研究しようかと少し迷ったが，アメリカでは動機づけ分野では達成目標という概念についての研究が盛んになりつつあることを知った。新しいもの好きの私はすぐに飛びつき，UCLAにいた時もその内容についても研究発表した。ドウェックは達成目標には学習目標（learning goal）と遂行目標（performance goal）があるとし，前者は知りたいとか理解したいという目標で学ぶこと，後者はよい成績をとって皆に承認してもらいたいという目標で学ぶことを意味し，前者のような目標をもてば，たとえ難しい問題に直面しても粘り強く解決しようとするが，後者の目標をもち，しかも自分の能力に自信がないと無気力に陥ると考えた。また，2つの達成目標のうちどちらをとるかは知能観によって規定されると言う。すなわち，知能は努力により変容しうるものだという増大的知能観をもてば学習目標を抱くことになり，逆に知能は努力しても変わらず生まれつきのものだという固定的知能観をもてば遂行目標を抱くというものである。私たちは，達成目標についての質問紙を作成し，追試的な研究を行った。ここで見い出された重要な知見の一つは学習目標は1因子であったが遂行目標は2因子に分かれたことである。つまり，人から承認されたいという目標（遂行目標α）と成績の向上そのものをめざす目標（遂行目標β）に分離された。その内容をJapanese Psychological Researchに英文で書いた論文も外国の研究者からまったく注目されることはなかったが，この論文が見出したことは実はアメリカでエリオットら（Eliott, E.S., 1996）がその後2つの目標を接近・回避の次元で分類するのがよいと提案していることと少し重なっているように思われる。達成目標のいくつもの研究で学習目標とパフォーマンスは明確に正の相関があるが遂行目標ではその関係が一貫しないことから，遂行目標には性質の異なる要素がはいっているかもしれないと疑われるようになった。厳密には遂行接近目標はほめられたいからがんばり，遂行回避目標は叱られたくないからがんばるということになろうが私の因子では前者が遂行目標β，後者が遂行目標αに近い。とにかく遂行目標は1つではまとまらない。この2つの目標の性質の違いは現実の成績との関係でよりクリアにされた。これがもう一つの重要な知見で遂行目標βは成績と強い正の関係にあったが遂行目標αは負の関係にあった。さらに学習目標は理論的には成績と最も強い正の関係になりそうだがほとんど関係がなかった。

ところで，この達成目標という概念は内発的動機づけ（学習目標），外発的動機づけ（遂行目標）と重なっているといえる。したがって，前者の方が後者よりも学習を促進しやすい動機づけとして位置付けられていた。しかし，この重なりについて強く指摘する論文はみかけない。

この時期，私が行った研究の中でおもしろい研究と思うのは一つは原因帰属について自発的に自分の成績の原因帰属をするというのは合理的思考を好む西洋人であり，日本人はあまり自発的に原因帰属しようとしていないということを文章完成法により明らかにしたものである。さらにもう1つはピアノ，算盤，習字などのいわゆる習い事についての動機づけについて研究したことである。長期にわたりそのような習い事をする人は初期には親にほめられるのがうれしくてのような外発的動機づけで開始する人が多いが後になるとやること自体がおもしろくなるという内発的動機づけが優勢になっていた。

名古屋大学教授時代前半期

教授になってからの10年ほどを前半期と便宜的に区

分する。教授になる前後で力を入れていたことの一つは動機づけの発達に関する本の出版である。私自身，発達心理学に関しては学会員でもないし，それほど関心ももっていなかったが，いつ頃からか動機づけの発達についてわが国で出版された本がないことに気づいた。私自身は動機づけ研究の中で原因スキーマの発達の研究はしてみたが，乳児や幼児の動機づけはどのように考えられているのか，また，逆に老年期の動機づけとはいかなるものなのかを考えてみたくなった。そこで，動機づけ発達の最初と最後の段階を私が書き，残りの部分を知りあいの動機づけ研究者の方にお願いしてできあがったのが有斐閣から出版した「動機づけの発達心理学」である。ただ私自身がにわか勉強で書いたこと，さらに何人かの執筆者の書き方がまちまちであることなどからまとまりのある本にはならなかった。

この時期の動機づけ研究の主要なテーマは内発的動機づけと外発的動機づけの概念上の区分をどう考えるかということであった。実は私は既に1988年，村上英治先生の退官記念で出版された「教育心理学への歩み―自分史からの出発」（川上書店）で「動機づけ研究の周辺」と題した小論を書かせていただいた。その中で「内発的動機づけと外発的動機づけの交絡」として「内発的動機づけと外発的動機づけという2つの概念は決して分離したり対立しているものではなく，絡み合い連続帯状をなしていると考えた方が妥当のようである」と書いている。私はその頃，うかつにもデシとライアン（Deci & Ryan, 1985）が自己決定理論でその両者の連続性を指摘していたのをまったく知らずにいた。したがって3年ほど遅れはしたが私自身も経験のなかで内発的動機づけと外発的動機づけは対置されるべきものではないという見方に至っていたことを意味している。私が直接，自己決定理論に接したのは当時動機づけの研究会を開催しており，そこで若くして夭逝された丹羽洋子先生の発表を聞いてであったと記憶している。私は特に1990年前半頃からこの自己決定理論に強い関心をもち，様々な研究を行った。外的動機づけ，取り入れ的動機づけ，同一化的動機づけ，内発的動機づけ連続帯状での隣同士の相関が高く，離れるに従って相関が低くなるという安定した結果がえられることに満足した。Japanese Psychological Research に載せた「Between intrinsic and extrinsic motivation」は2，3年ほど前，その雑誌に過去に掲載された論文の中でダウンロードの回数が第2位だったと知らされた。枠組み自体オリジナルなものではなかったが，多くの人に関心をもってもらったことは素直にうれしい。そしてタイトルだけは日本人としては凝ったものをつけたと今でも自負している。だが，えらそうな言い方にきこえるかもしれないがこの程度の論文が相対的に多くダウンロードされるようでは日本の英文雑誌のレベルは確かに高いとはいえないだろう。

自己決定理論に基づいた研究をまとめて初めて単著として「自己形成の心理―自律的動機づけ―」を1998年に出版した。そこでは私は2つの動機づけが自律―他律の連続帯状にあることは従来の理論と同じだが，手段―目的という従来の外発―内発を区分する次元も加えて2次元で考えた。その結果，目的的で自己決定低（他律的）という動機づけも存在することになるが，それを私はみかけ上の面白さからくる擬似内発的動機づけと独自に位置づけた。つまり，先生たちが一生懸命，面白い，楽しい課題を準備して児童・生徒に与え，子どもたちは一時的に動機づけられるが，本人たち自身に内面化されたものでない動機づけをいう（図1参照）。私は学校現場が内発的動機づけ一色になっていくことにかねてから違和感をもっていたが，このモデルを示したことでそのことに警鐘を鳴らし，違和感を少し解消できたような気がする。内発的動機づけの掛け声が多い割に日本の子どもたちの学力が向上しないのはこのような他律的な，与えられた課題が一時的に面白いだけに終わってしまうためだと考えている。

さらに当時，関心をもちながら論文には十分結実しなかったテーマがある。そのキイワードは「感動体験」である。原因帰属理論や達成目標理論は特に認知的動機づけ理論と呼ばれ，認知を重視しており，それに基づいた研究がおこなわれているが，私は動機づけに強く関与するのは認知よりもむしろ感情ではないかと常々考えてき

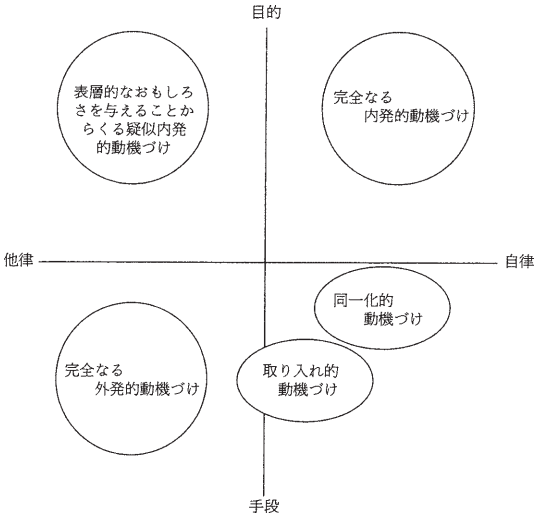

図1　動機づけの二次元分類
（自己形成の心理―自律的動機づけ，1998より）

た。そこで感動体験のようなものをまず集め動機づけとの関係を探ろうとした。しかし，自由記述では書くことに負荷がかかるためかなかなか真実が拾い上げれなかった。ただこのようないわば感動体験として強く自伝的記憶として残っていることが動機づけの原動力になることは頻繁にありうると思っている。

私は2000年4月から2年間附属中・高等学校長を務めたがこの前後では附属の教育実践を対象にした研究もいくつか行った。特に「総合人間科はどのように役立つか」といった研究は附属が総合的学習の先進校となろうとしていた時期だっただけに思い出深い。校長としての経験は学校の裏側まで知ることができ，教育心理学者として意味があったと思っている。理科の実験で生徒たちが気分が悪くなる，校庭で生徒が喫煙しているのではとの近隣から情報が入る，非常勤講師に生徒が暴言を吐くなど思いがけない事件が次々起きた。しかし，私が在任中，最も大きな事件はバスケット部の高校生男子生徒が練習中に倒れ，若くして帰らぬ人となったことである。新聞社はニュースバリューを高めるためか学校の落ち度を探そうという姿勢で取材を求めた。それに応じた私の発言が歪んで報道された苦い経験もある。ただ救いなのはご両親が学校の事情をよく理解して下さったことであり，友人たちがその後も本人を忘れることなく家族との連絡をとってくれたことである。

学校長の職が形式的には完全に終わってはいない2002年3月中旬から私は文部科学省派遣の短期の在外研究でジョージア大学とトロント大学にそれぞれ1カ月過ごした。ジョージア大学にいた時，ダグラス・A・クリーバー（Douglass A. Kleiber）に著書であるレジャーに関する心理学書を偶然渡され，暇にまかせてそれを読むうちに興味を抱いた。氏は当時学部長をして多忙だったが，私を家に招いてくれたり，ジャズの演奏会や野球の試合にも連れて行ってくれた。

トロント大学オンタリオ教育研究所に移動した後に共著者のロジャー・C・マンネル（Roger C. Mannell）にバスでウォータールー大学まで会いに行き翻訳の約束を取り付けた。そして帰国してから2年ほどで世界思想社から「レジャーの社会心理学」として翻訳書を出すことができた。ただ，この仕事は一時的に動機づけられたもので結局，その後レジャーについて研究するようなことはなかった。

ところでトロント大学に行った目的は感情の研究者であるキース・オートレイ（Keith, Oatley）に会うことだった。彼は感情日誌によって感情研究をしていたのでそれを学ぼうと思ったからである。彼は英国生まれでみた目もまさしく英国紳士といった品格のある人物だった。また，小説家としても活躍しているようであった。日常生活の中での感情を書き留めて，彼なりの手法で分析するのが主な仕事であった。細かな分析の手法を論文にしていたが私は感情をそこまで細かく分析することに共感できなかった。小説家という立場と感情の心理学的分析はどう繋がるのか不思議に思ったが私には二股をかけれる心理学者への羨望の気持ちは今もある。

まったく蛇足の話としてトロントにいた時，4月の末頃であったが気温が急上昇し，2，3日，30度近くになった。私はこの時を逃すことなく，ちゃっかりナイアガラの滝を見にバスで出かけた。しかし，翌日，トロントの街は雪化粧していた。不思議な気候だと驚いた。

名古屋大学教授時代後半

私の関心は少しずつ感情に向けられていった。なぜなのか十分説明できないが，五木寛之の随筆をその頃よく読んでおり，その中にたびたび「現代人は悲しみの感情を喪失している」というような記述があった。また，学級崩壊などが話題になり，「キレる」というような言葉がマスコミを賑わすようになったこと等がきっかけかもしれない。ところで私は随筆を読むのが好きで学生時代から中年以上の人が好んで読むような文藝春秋などの随筆に目を通すのが楽しみだった。著名な書き手の随筆の中には平凡な心理学者より遥かに鋭い人間への洞察がある。今でも文藝春秋からベストエッセイ集が毎年出版されるのでいつも心待ちにしているし，特に社会心理学者，外山みどり氏の父君の外山滋比古氏の随筆などは心理学者の発想を豊かにする宝庫といえる。最終年度の今年，大学院の授業で随筆を読んで，研究計画をたてるということも実践でき楽しかった。

悲しみから怒りがドミナントな社会への移行を説明する概念を模索する中で自己愛というものとも異なる仮想的有能感という概念を設けることにした。これは特別な根拠もなく他者を軽視することで感じる有能感を意味している。私たちは2003年の大阪教育大学主催の日本教育心理学会の自主シンポジウムでこの概念を公にした。しかし，そのシンポジウムで特に大きな反響があったわけではない。私はこの概念と関係なく，何年か前から新書を書いてみたいという願望は強かった。それは新書を既に3冊ほど書いておられた梶田先生に刺激をうけたこともあるが，研究と社会の接点というものを考えた時，新書のような一般書で心理学の内容をふつうの人々に知ってもらうのが一つのやり方と考えたからである。その頃私はよく，学会誌の論文はどれほどの人が読んでくれているのだろうかと考えた。現在は日本心理学会なり日本教育心理学会の会員は7000人をこえ，文系の学会

としては相当大所帯なものになってはいるが，学会誌の論文を読むのはその領域を専門とする人で100人に満たないのではないかと推測したりした。さらに論文は所詮特殊な心理学語で書かれたもので一般の人は読む気になれないだろうと考えた。そして，内容的に一般の人にも理解できて初めて心理学と社会の接点ができる気がしていた。正直にいえば，専門の動機づけで新書を書くことをかなり前から模索していたが，満足のいく筋書きがどうしても作れなかった。その時，感情の研究から「仮想的有能感」の概念を提唱し，これなら，むしろ一般の人々の理解がえられそうだという予感がした。

しかし，一般向きの本を書くのは何分初めてのことだったので試行錯誤の連続であった。3年ほど前から準備して2006年の夏，大方書き上げ，指導していた当時の大学院生たちに合宿という形で批評してもらった。特に現代の若者は仮想的有能感を抱いているのではないかという趣旨の内容だったので，まず院生の年頃の人たちがある程度共感するものでないと妥当でないと考えていた。彼らは遠慮なくいろいろ問題点を掘り起こしてくれたが，この原稿は今の若者とは異なる像を描いている，といった厳しいものあり，正直，自分の観察眼なり感受性に自信を失いかけた。だが，ここまできたらやるしかないと秋にはいって新書を出している出版社に原稿を送り，出版の打診をした。しかし，2社はすぐに返事が送られてきて拒否された。かなりショックを受けたが，次に講談社現代新書は心理学関係の人も何人か書いているので訊ねてみた。すると1週間もしないうちに編集者が東京からやってきて「来年二月二十日に出版の予定でいきます」という返事だった。同じ原稿でも評価がこんなに違うのかと驚いた。編集者の話ではその当時は新書の著者の大部分は出版社から依頼された人で，いわゆる新人で持ち込み原稿という形をとるのは少数派ではあるので，慎重に検討するらしかった。

予定通り完成した「他人を見下す若者たち」の帯は本のタイトルの2倍の太さで「自分以外はバカの時代」という言葉が書かれ，さらにその内容を象徴するような石原まこちん氏の「ザ3名様」の漫画も描かれているという奇抜なものだった。そのような出版社側の企業努力が功を奏してか，予想外の売れ行きとなった。テレビやラジオのインタビュー，新聞社，雑誌社の取材など思いもかけぬことが次々おこり，2006年の10月には講演を10回以上もしたことを覚えている。一方ブログには「仮想的有能感を持つのは団塊世代のお前たちだ」といった批判もあったし，怒りの気持ちが抑えられずわざわざ長い手紙を送ってくる人もいた。一般書の反応の大きさに驚いた。韓国と台湾で翻訳書も出版されたがあまり売れ行きはよくなかったようだ。

しかし，新書出版の時，実は仮想的有能感そのものの心理学的研究はまだ道半ばという段階であった。2008年から3年間の科学研究費基盤研究（B）が受けられるようになったこともあり，何人かの指導生とともに研究を続けた。この成果は私が退職する頃には本として完成するはずである（仮想的有能感の心理学，北大路書房）。しかし，この研究では本来無意識的な仮想的有能感を「他者軽視傾向」として質問紙で測定したもので代用しているところに根本的問題がある。測定法そのものをできれば投影法的なものにするのも一考である。仮想的有能感と自尊感情でタイプ分けした有能感タイプも表面的には妥当な分類法とみられやすいが分類の基準となる平均値はそれぞれのサンプルにより異なっており統一する必要がある。さらに最も重大な問題点はこの仮想的有能感の英訳を私自身があまり深く考えたり，英語の堪能な人に十分相談することもなく「assumed competence based on undervaluing others」としてしまったことである。competenceという概念に感情的ニュアンスを盛り込むのは無理であったかもしれない。英文で書いた論文もあるが，外国からまったく反応がないのはそのためかもしれない。しかし，日本の多くの人に共感的理解が得られたことは，英文の表現が正確で巧みであればある程度海外の人たちにも理解されるはずであると考えている。

さて，この数年間，私は仮想的有能感の研究だけに従事してきたわけではない。これまでの研究生活でも私は数年ごとに研究テーマを変えている。6〜7年ごとに一つの研究に区切りをつけていくのが何か私の能力や個性にあっているような気がしている。といっても一つのテーマにきっちり終止符を打って次にいくというよりも幾分重なる時期を持ちながら移行するのがよいと考えている。私の定年前の最後のテーマは大げさにいえば自分の動機づけ理論の確立である。最後にはそれをしたいと随分前から考えていたので大学院や学部の演習の授業などでも自分の関心事をとりあげて情報収集したり，多様な意見に耳を傾けてきた。

アトキンソンの達成動機づけやワイナーの達成動機づけの原因帰属理論について研究を始めて，達成目標の理論，自己決定の理論と私自身，アメリカで生まれた動機づけ理論をそのまま追究してきた感がある。それらは認知を重視する認知的動機づけ理論と呼ばれるものであった。しかし，その理論に乗っかる仕事を続けながら一種の違和感を感じてきたことも確かである。それは前にも少し触れたように端的にいえば人間はそれほど合理的なものなのかという疑問である。人間はそれほど合理的，論理的，意識的に行動するものではなく，認知というよ

りはむしろ無意識的に感情に支配されて動機づけられる面が多いのではないかという思いが沸々と湧いてきた。その一つの現れが前にも触れた感動体験，自伝的記憶，教師の雑談などの研究であり20世紀の終わりごろから関心が芽生えてきたといってよい。しかし，それらは主に以前のポジティブな感情体験が記憶され動機づけを引き起こすのではないかという指摘に留まった。

だが，ここ2，3年私が特に気になったのはむしろネガティブな感情である。テレビのスポーツ番組などでは負けた選手の口から「次はリベンジするようがんばる」といった言葉が頻繁に聞かれる。しかし，これまで動機づけ研究ではネガティブ感情が動機づけを促進するというような枠組みは存在しない。一般の人が一定の常識としてネガティブ感情が動機づけにプラスに働くことを察知しているのに理論として扱われていないのは不思議な現象といわざるをえない。スポーツの世界だけでない。仕事の世界でも同じようなことが起こっているように思われた。それを感じたのは以前にNHKの人気番組であった「プロジェクトX―挑戦者たち」での話である。すべてではないが，多くの話の中に，悲しみ，怒り，屈辱感をバネにして仕事に取り組み成功に到る過程を垣間見ることができた。その後の番組「プロフェッショナル―仕事の流儀」にも同じように決して内発的動機づけやポジティブ感情だけで成功するのではなく，ネガティブ感情が大きな役割を果たしている例が多いように思われた。もちろん自らネガティブ感情を求めるわけではないが，様々な環境要因によってそのような状況に陥ることがある。もちろん，ここでネガティブな感情をそのまま受け入れてしまうだけならば動機づけが生じないどころか，無気力だとか鬱だとかに向かわないとも限らない。しかし，そのネガティブ感情から脱出したいという強い気持ちをもち，将来のポジティブ感情の獲得を想定するとそれは大きな力になるように思われる。つまりネガティブ感情に強い不満を感じるほど動機づけは高まると言えよう。それはおそらく本人が不満を脱した先の目標に大いに価値を置いているためであろう。つまりそれに到達した時の強いポジティブ感情を想定している時と言える。最も先の目標に価値をおいていなければ強いネガティブ感情も生じないだろう。

ところでネガティブ感情と動機づけの関係に注目した研究がこれまでまったくないかといえば，そうではない。特に私が注目したのはカーバーら（Carver, 2004）の目標のずれの大きさとその時生じる感情，さらにその感情がどれほどの次の努力行動を生むかの仮説である(図2)。

これは達成事象の成功・失敗を伴うものに限定されてはいるが，成功した場合よりも，あと一歩で目標に到らなくて失敗した場合の方が次に動機づけが高まると予想しているところに新鮮さがある。そして，ズレが小さい状態での失敗は特に強いネガティブ感情が生じ，それが動機づけになっていると考えている。従来の多くの動機づけモデルは，成功すれば誇りのような自尊感情が高まることで失敗する場合よりも動機づけが高まると説明するのが通常であった。しかし，悠々成功すれば安堵するとかリラックスするという場合も多く，その時次への動機づけがあまり高まるとは考えられない。一方失敗の場合はこれまでの心理学の説明では恥の感情抱いたりして動機づけが低下すると考えるのが常であった。もちろん，同じことで何回も失敗すればそのような傾向がみられるだろう。しかし，次にチャンスがある場合ならば，1，2度の失敗は強い反発力を引き起こすことが想定されるのである。

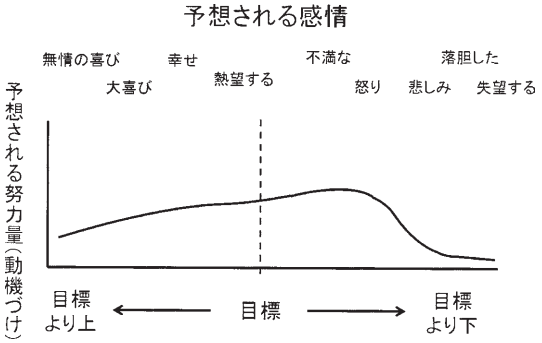

図2　目標と結果のズレの程度と動機づけ
Caver, C.S. 2004 Emotion, 4 3-22より

その感情の中の中心的な働きをしていると考えられる「怒り」の感情については他のネガティブ感情と異なり，回避行動でなく接近行動を引き起こすという心理学的知見もある。また，脳の研究では，左前頭皮質の活動はポジティブ感情，接近動機づけに関係し，右前頭皮質の活動はネガティブ感情，回避動機づけに関係するとされている。しかし，通常ネガティブ感情として位置付けられる「怒り」だけは左前頭皮質の活動と関係するという。このように感情研究では怒りだけが特に動機づけ的要素をもったものとして扱われているが，先に示したプロジェクトXの登場人物も何らかの意味で怒りとも関係していると解釈できる。たとえば，システムキッチンの発明者は新婚時代，何もなくて台所で働く妻に迷惑をかけているといった悲しみからその発明に動機づけられているように見えるが，それは悲しみを乗り越えるために自分がなんとかせねばという自分への不満あるいは怒りのようなものを感じていたと推測されるからである。

もう一つの動機づけ研究の新しい関心事（これを思い

ついたのは2年ほど前のことであるが）は，前述の強いネガティブ感情が引き起こす強い動機づけとは全く逆の弱い動機づけである。それは端的に言えば家での仕事の動機づけといってよい。これまで仕事の動機づけといえば会社等の動機づけを意味していたが，家の中にも仕事は存在する。しかし，多くの場合，会社での仕事と異なり，仕事を遂行したからといって誰からか報酬を与えられるわけではない。誰かがやるのが当然のことであるがやらないことで罰を与えられるということも少ない。ただ，誰もやらなくてすむことではない。人は否応なく毎日食べ，毎日排泄する，その繰り返しである。したがって，たとえば炊事なども毎日誰かが3度，3度せねばならない。このことはあまりにも当たり前で習慣的に繰り返されているようにみえるが，たとえ主婦であっても，他のことに忙殺された日などは料理をするのが面倒になり，一家で外食をしたり，スーパーで弁当を買ってきたりすることもある。一方で，気分がよい時などはおかずを何品も準備したりする。このように一人の主婦でも炊事への動機づけが高い場合もあれば低い場合もあるといえる。

炊事は家事の一種と捉えられるが，家事には他にも洗濯や掃除などがあろう。そしてこれらの性質は幾分異なっている。炊事は毎日だが，洗濯や掃除は毎日でなくともよい。洗濯機や掃除機を利用しているとすると，洗濯や掃除の工夫の余地はあまりないが，炊事はどのような料理をつくるか工夫の余地や創造性が発揮される余地がある。

ただ，これらの仕事に共通なのは他の仕事のように蓄積が出来ないことである。一度やっても時間が経てば再度やらねばならない。加藤登紀子さんはこれを「プラスマイナスゼロ」の仕事と表現しているようだが言い得て妙である。人をよく観察していればこれらの動機づけにも個人差は存在する。なぜ，家の仕事にも動機づけの違いが見られるかを検討することが今後も研究のもう一つの関心事である。今年度は挑戦的萌芽研究として科研費も得たので今後数年の検討課題にしたい。これは心理学的な問題でもあるが，家事を動機づけとしてとらえること自体，家政学や福祉学の問題でもあるように思われ，他の学問分野への広がりも期待できる。

ところでこの種の動機づけは家事だけには限らない。いや広い意味では家事に入るのかもしれないが，子育てや介護など現在は大部分女性が主にしている仕事は動機づけの質としては似ている。ただ，子育てなどはプラスマイナスゼロとはいえ，対象となる子ども自身は確実に成長していくという変化があり，単なる家事よりは魅力的なものと言える。しかし，一方で相手が人間であるだけに取り扱いがむずかしく，育児ノイローゼになったり，育児放棄をする人もいる，動機づけのメカニズムは様々だと言える。特に厳しい仕事と考えられるのは病人や老人の介護であろう。介護して相手から言葉かけなり笑顔がかえされる場合はまだよいが，認知症などで反応が全く変わらない場合もある。しかし，介護にも喜びを感じている人は皆無ではない。

ところでこのような家の仕事の動機づけを支えているのは実は人間関係を基盤としたポジティブな感情ではないかというのが私の仮説である。すなわち，家庭での人間関係がよくて行為者がポジティブな感情を有していれば家の仕事は無意識的に習慣的に処理されていくように思われる。だが，人間関係が悪く行為者がネガティブな感情や気分をもっている場合には，どうしても負荷のかかる家の仕事は重荷として意識され，何のために自分がせねばならないのかと考えやる気が低減しよう。それは前者の場合には家の仕事に価値を見いだし，後者の場合は価値を見いだせないということでもあろう。

さて，この最後に行き着いた自分の動機づけ理論というのは端的にいえば，認知よりも感情に重きを置いた動機づけ理論であり，図3のように纏めることができる。この図は横軸は覚醒（意識）水準で左へいくほど低く，右へ行くほど高くなっている。縦軸は動機づけ，認知，感情の高さであるが，基本的には動機づけはこれまでと同じく認知成分と感情成分によって成立すると考えている。どちらかが欠けても動機づけは生じないことになる。しかし，両者を単純に乗算したものかどうかは疑問である。ここでは便宜的に両者をほぼ加算したものがおよその動機づけ量とみなすことにする。感情は平静な状態でも一定程度常に機能していると考えている。しかし，身辺に大きな出来事が生じると感情は高まる。たとえば，中間試験に失敗したり，友人との間にトラブルが生じたとすれば感情は高まろう。その時，注意は集中し，認知機能も高まると考えられる。それは先に述べたネガティ

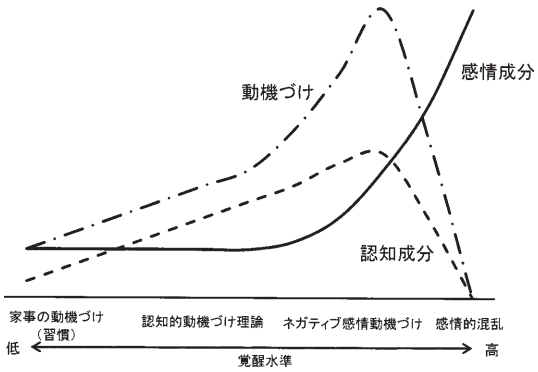

図3　動機づけ，感情，認知の関係

ブ感情が生起し最も強い動機づけが生じる状態に相当する。そしてもっと大きな変化，たとえば入学試験に不合格だったとか，失恋したといったような場合はさらに強い感情的混乱が生じることになる。あまりに強い感情は思考や認知を停止させるので動機づけも生じないことになる。通常の認知的動機づけ理論が扱っているのはそのような強い感情が生じておらず，極めて冷静な判断ができる，図でいえば中ほどの地点であろう。この時点では認知の働きの方が感情の働きより優っていよう。他方，家事の動機づけのようなものは考えることなく覚醒水準が低く，ほとんど習慣的になされているので図の左側の部分にあたると思われる。認知の機能も感情の機能も弱いが相対的には感情の方が強く働くといえる。そして注目すべきは他の箇所と異なり，ここではポジティブ感情とネガティブ感情は逆方向に働くということである。つまり，ここではポジティブ感情は習慣的動機づけに促進的に，ネガティブ感情は抑制的に働くと考えられる。つまり，現在の動機づけ理論は覚醒水準がほどほどの冷静に考えられる部分しか扱っておらず，両極の感情が強く働いたり，ほとんど無意識に行う行動の動機づけは視野にはいっていないのである。

このような感情を中核に置いたこれまでの認知的動機づけ理論だけでは説明できない事象も包含できる動機づけ理論を精緻化することが名大定年後の私の課題である。どこまで歩いていけるかわからないが，動機づけ研究をしてきた私の後に道ができただけでなく，私の前にもまだ道があるような気がしている。

だが，自分が歩いた後に道ができていると考えること自体，研究者が陥りやすい不遜な推測かもしれない。研究者は業績表などを書くと，自分がしっかり仕事をしてきたように感じ，自己満足しやすい。その意味では他の職業では味わえない幸福感，達成感を享受できる。しかし，一方で足跡をつけてきたはずの場所には早々と夏草が生い茂り，何もなかったようにざわざわと風に吹かれているような光景も想像する。自分のした研究を後続の研究者が役立ててくれることなどほんとうにあるのだろうか。周りを見ていると多くの心理学者はアメリカの流行を追って前ばかりを見つめて走っているように思われる。否，私もそうだった。新しい洋服を求めて疾走するが，すぐにまた脱ぎ捨てる。心理学はほんとうに積み重ねて着実に成長できる学問なのかという基本的な疑念もないわけではない。

最後に，ここまでなんとかたどり着けたのは私が出会った多くの先輩諸氏や同僚たちの励ましや示唆によるところが大きい。いや，若い有能な学部生や大学院生諸氏からも教えられることも多々あった。また，不特定多数の実験・調査参加者にもご協力いただかねば研究は進められなかった。1年に千人，協力いただいたとして4万人ほどの方に参加いただいたことになる。皆様に心より深く感謝申し上げ，筆を置くことにする。